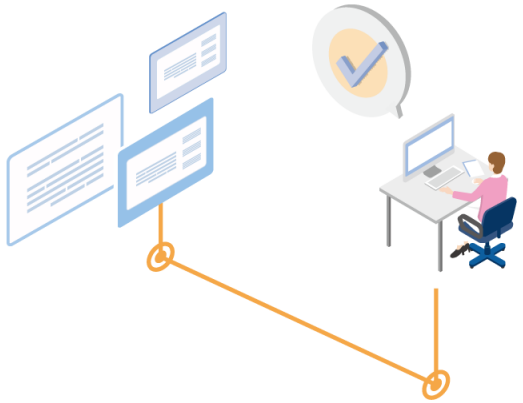
2024～2025年度 厚生労働科学研究費 補助金（がん対策推進総合研究事業）

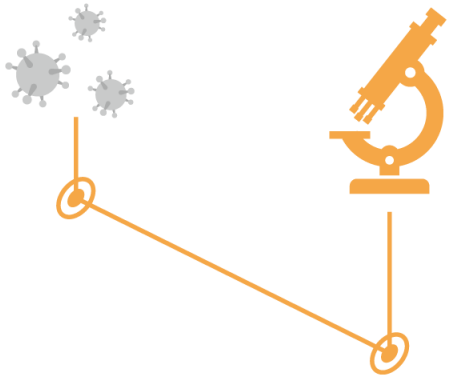
HPV検査単独法による子宮頸がん検診に関する普及啓発に係る医療機関向けツールの開発のための研究（宮城班）

研究代表者	宮城　悦子
研究分担者（五十音順）	黒川　哲司　後藤　温 齊藤　英子　佐治　晴哉 鈴木　幸雄　町井　涼子 水島　大一　森定　徹 吉田　穂波



Let’s start e-learning

子宮頸がんの疫学・疾病負担



HPV検査単独法を施行するものが知っておくべき疫学と疾病負担に関する知識

1. 子宮頸がんの疫学
2. 子宮頸がんの予防法
3. 子宮頸がんの症状
4. 子宮頸がんの治療と予後

1 子宮頸がんの疫学

1. 最新の年間罹患数は約10,000人
死亡数は約2,800人（罹患数は2021年　死亡数は2024年）

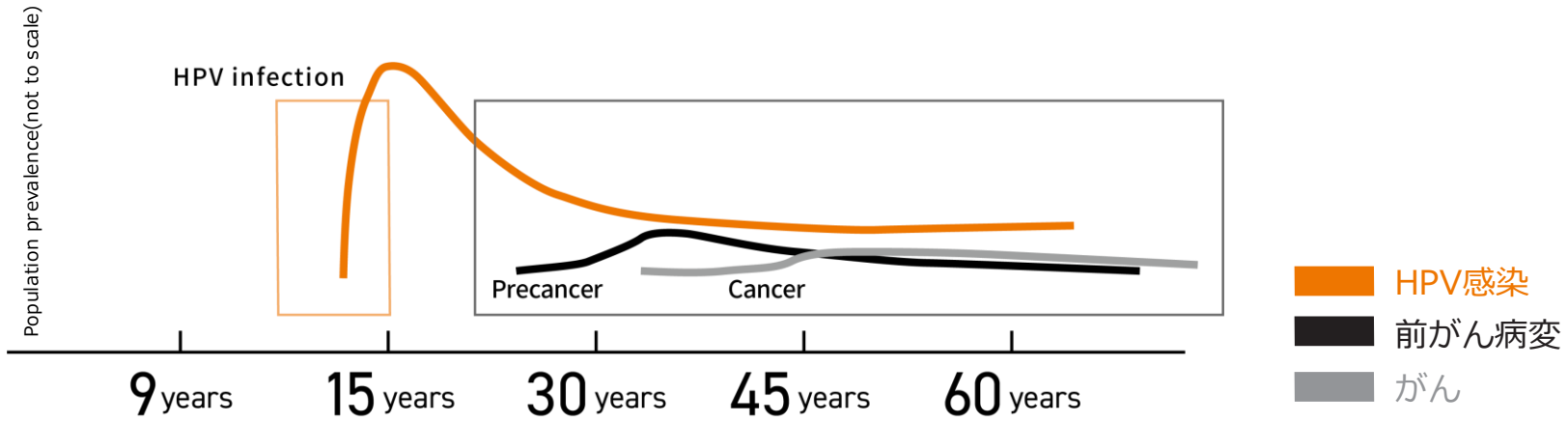
2. 子宮頸がんの80-90%が扁平上皮がんであり、
その内90-95%がHPV関連扁平上皮がん

3. 子宮頸がんの年齢階級別罹患率は30歳代から50歳代に高い

4. 危険因子として喫煙の関与が考えられている

がん情報サービス　https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/data/dl/index.html#a14
Female Genital Tumours, WHO Classification of Tumours・5th Edition p347
科学的根拠に基づくがんリスク評価とがん予防ガイドライン提言に関する研究より改編

2 子宮頸がんの予防法



1次予防HPVワクチン

ワクチンで感染者を減らす

2次予防

検診で前がん病変を見つけ
“がん”の芽を摘む

WHOは70%の女性が35歳までに最低1回は高精度の検診を受け、さらに45歳までにもう一度を検診を受けることを推奨している

WHO : Global strategy to accelerate the elimination of cervical cancer as a public health problem
https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/336583/9789240014107-eng.pdf?sequence=1を改訂

3 症状

- 子宮頸部前がん病変および子宮頸がんに特徴的な臨床症状はない

子宮頸部前がん病変～初期の子宮頸がん

- 自覚症状はほとんどなし

進行した子宮頸がん

- 特有の症状はないが、以下のような症状がでることがある
  - 性交時など月経中（生理中）でないときの出血（不正性器出血）
  - においを伴う濃い色をしたおりもの
  - 水っぽいおりもの
  - 下腹部や腰に痛み
  - 尿や便に血が混じる

このような場合は、
婦人科受診を考慮する

国立がん研究センターHPを参考に作成
https://www.ncc.go.jp/jp/information/knowledge/cervical/020/index.html

4 子宮頸がんの治療と予後

1. 子宮頸部前がん病変に対しては、術前の検査でCIN3やAISと診断された場合は、CIN3とAISの混在や浸潤がんの併存もありえるので、確定診断のために円錐切除術を行うことが基本になる

2. 子宮頸がんIB1期以上の診断を受けた患者全てに基本治療が行われた場合、年間約750人の39歳以下の女性が子宮摘出により妊孕性を失うことになる

3. Ⅰ期（がんが子宮頸部にとどまるもの）で治療を行えば5年生存率は約90%程度である

4. 手術や放射線治療などによる排尿障害やリンパ浮腫などの合併症で著しく生活の質を低下することがある

子宮頸癌治療ガイドライン
日本産科婦人科学会婦人科腫瘍委員会報告 2022年患者年報（日本産科婦人科学会雑誌77巻3号2022年）
日本産科婦人科学会婦人科腫瘍委員会報告 第65回治療年報（日本産科婦人科学会雑誌77巻3号2022年）